平成28年度　全国学力・学習状況調査における
北九州市立　　飛幡　　中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成28年4月19日（火）に、3年生を対象として、「教科（国語，数学）に関する調査」と「生徒質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1．調査の目的

⑴ 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

⑵ 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

⑶ そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2．調査内容

⑴ 教科に関する調査（国語，数学）

主として「知識」に関する問題（A）	主として「活用」に関する問題（B）
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容 ・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力 ・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

⑵ 生徒質問紙調査

生徒質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

⑴ 全国・本市の学力調査（国語A・B，数学A・B）の結果

本年度の結果	国語A		国語B		数学A		数学B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	24.3	74	5.8	64	21.2	59	6.1	41
全国	25.0	76	6.0	67	22.4	62	6.6	44

⑵ 本校の学力調査結果の分析

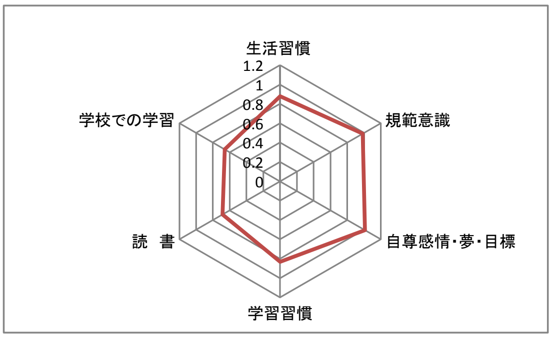
国語A			
全体的な傾向や特徴など	中学三年生として知っておくべき語彙力が、かなり不足している。特に、難語や慣用表現の知識が不足しており、結果文意を捉えられない生徒が多い。文脈から語意を判断・推察できる生徒もいるが、それもごく一部である。	全国平均正答率との比較	下回っている
よくできた問題	「白羽の矢が立つ」の意味を問う問題になると、文脈から予想や判断をする力はある程度備わっているものと思われる。		
努力が必要な問題	「国語A」9三ア、ウ、オのような「慣用句」に対する知識が低く、こうした語句を問う問題に対しては、正答率が下がる傾向がある。むろん、作文においてこうした表現を使いこなす力も低くなる。		

国語B			
全体的な傾向や特徴など	あるテーマに対し、「仮説→調査や検証→考察を確立」こうした流れに則して論理的に物事を考えていく力が弱い。学習に於いて「答えや結論を求めたがる」「意見をぶつけあう場面を避ける」「安易に人に聞いたりスマホなどを利用したりし、また疑問をもたずに受け入れる」といった状況が見受けられる。	全国平均正答率との比較	下回っている
よくできた問題	特筆すべき問題はない。		
努力が必要な問題	1三は、条件2の見誤りが多く見透けられた。何を問われているのかが把握できないことは、語彙力のなさでもあり、コミュニケーション不足でもあろう。		

数学A			
全体的な傾向や特徴など	ほとんどの問題で全国平均正答率を下回っており、特に平面図形や空間図形といった幾何的問題での正答率が著しく低い。また、基礎的な計算の正答率も高くなく、計算力の不定着が明らかになった。	全国平均正答率との比較	下回っている
よくできた問題	自然数を選ぶ問題や反比例の関係を考える問題は、比較的よくできていた。		
努力が必要な問題	角度を求める問題や外角の和の問題など、特に平面図形の問題は努力が必要である。		

数学B			
全体的な傾向や特徴など	全国平均正答率に比べると、わずかに下回っているが、ほとんど差異はない。記述問題は、よくできている傾向にあるが、その一方で未回答率も高く、理解している生徒とそうでない生徒の差が大きいように思われる。	全国平均正答率との比較	下回っている
よくできた問題	理由を説明させる問題に関しては、おしなべて正答率がよい。		
努力が必要な問題	一次関数の問題は、どれも努力が必要である。		

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析

・将来の夢や人の役に立つ人間になりたいという意識は全国を大きく上回っているが、そのための具体的な取り組みや実行させることが課題である。
・学習習慣、特に家庭学習の地道な取組が不足している。学校全体での具体的な取組が必要である。
・授業におけるめあて・まとめの提示が不充分なので毎時の取り組みが必要である。また、話し合い活動や問題解決学習の活動の取組を強化する必要がある。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組（全校で・学年で・学級で）

読書の不足を含め、語彙力がかなり低い傾向にある。また、物事を論理的に考察できない生徒が多い。そこで、作文を書かせ、自分の意見を述べたり、授業のまとめを感想として書かせたりする取組を行っている。また、数学では計算力の定着力・応用力が不足している。そこで、基本的な定着力を着けるため、朝自習等を利用し取り組んでいる。また、家庭学習のチェックや取組の見直しも検討する必要がある。

② 家庭生活習慣等に関する取組

自尊感情や夢・目標、規範意識などを持っている生徒は全国以上にいるが、日々の意識した取組が必要である。特に、各学年で発達段階に応じた進路学習を適切に行うことで、自己肯定感を持たせるとともに、夢や目標を実現させ、社会人として自立できる人間になるために具体的な進路計画を立てることで、行動に結びつけさせること必要がある。